年頭のごあいさつ

塾頭　高橋光雄

皆さまに於かれましては、令和2年の年明けを清々しいお気持ちで迎えられたことと存じます。さまざまな思い、出来事があっても、除夜の鐘を聞き新年を迎えますと、自然と身が引き締まり思いを新たにするものです。

わたくしは昨年、人見光太郎塾頭が理事長に就任いたしましたことから、年度途中ではありますが4代目の塾頭を拝命することになりました。岩淵克郎初代塾頭、片岡英信2代目塾頭、そして人見前塾頭と比べられますと忸怩たる思いを禁じ得ないのですが、与えられた職責を精いっぱい努めていく所存でおります。何卒ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、近年スマートホンが爆発的に普及し、ネット社会といわれてきたところのものが実感できるようになってきました。そんな折、コンピエーニュ工科大学の先生とＡＩ、Ｉｏｔの共同研究をしている先輩から、「デジタル経済社会における安全と信頼」をテーマとするフォーラムＪＳＳ（Japan Security Summit）に誘われ、参加してきました。それによると、情報・金融・生産・流通・消費など、私たちが生きる経済社会そのものがネットでつながり、短期間のうちに大きな変化を遂げるとのことです。

他方、虚子は「去年今年貫く棒の如きもの」との句で、日常・実務を支配する時の流れに対し、棒の如く太く固い確たるもの、力強い意志とそれを支える直立した時間を突き出しました。この「貫く棒の如きもの」は、持続する内的意識の自覚であり、身体が世界に包まれ世界に向かって開かれていても、自分は自分以外でありようがないという孤独の確認と、それによる自信でもあります。

立教志塾は一昨年、開塾30周年を迎えて記念誌「立教志塾30年の歩み」を発行し、その活動を振り返ってみる機会がありました。わたしは記念誌の編集にたずさわりながら、塾があることの意味、塾が目ざしてきたものが何かを考えてきました。今も昔も私たちにとって大事なものは、まず生活することです。さまざまな職場で働き、そこからの収入で成り立つ生活は一見すると堅固のようですが、実は薄氷をわたるが如くでリスクが多いものです。人づくりを目的とする塾が主として道を学び、従として術を学ぶとしているのは、社会がどのように変わっても、生活を担い支える主体として、一人ひとりが己の心の奥底を見つめ、お互いに錬磨し、学習する必要性と、その場を共有する重要性を認識していたからであります。

渡辺薫前理事長は、岩淵克郎著「わが心魂に響く人びと」序に、塾が錬成学習の場であると同時に「交わりの場であり、よき師よき友を持つことの幸せを味わう所でもあります。今後も交わりの中で生まれた心の琴線に触れたものを記し遺すことも大切な仕事と考え、一層の努力に務めたいと思います。」と、記しております。改めて前理事長の記した思いを噛みしめ、塾が「厳しくとも温かい、よき師よき友との交わり」の場であるよう努めてまいります。